H. v. Kleist と「Phöbus」誌（その2）

松　沢　芳　郎

1　「こわれ甕」上演

1808年3月2日の Weimar 劇場での上演は次のプログラムで知られている。

Weimar
Mittwoch, dem 2. März 1808.
Der Gefangene
Oper in einem Aufzuge, Musik von Della Maria
[folgt Besetzung]
Hierauf
Zum ersten Male:
Der zerbrochene Krug.
Ein Lustspiel in drei Aufzügen.

Walter, Gerichtsrat	……Oels
Adam, Dorfrichter	……Becker
Licht, Schreiber	……Unzelmann
Frau Marte Rull	……Wolff
Eve, ihre Tochter	……Elsermann
Veit Tümpel, ein Bauer	……Graff
Ruprecht, sein Sohn	……Wolff
Frau Brigitte	……Silie
Ein Bedienter	……Eilenstein
Mägde	……{Engels, Genast}
Büttel	……

Die Handlung spielt in einem niederländischen Dorfe bei Utrecht.
etc. etc.

これは不幸な結果に終って，その後は上演目録から削られねばならなかった。失敗の理由については，唯不充分な同時代の報告で知られているだけであるが，それをもとにして，最近 H. Sembdner が失敗の理由を「Der "Zerbrochene Krug" in Goethes Inszenierung」(H. S. : In Sachen Kleist. 1974) や Reclam 版 Erläuterungen und Dokumente (Kleists Der zerbrochene Krug) の中で見ている観点に立つものが多い。しかし後世の我々からすれば，実はどのように上演されたのかもはっきり掴めていないのである。

Sembdner はこの「事件は他の観客によっては述べられていないので，ここでは他の上演との取違えであるようだ」(L242f.) を認めながら，主として E. Genast の曖昧な報告を取

り上げている。

「すでに最初の上演でその作品に判決が下された，不当にも完全に落第だった。主として失敗の責任者は Adam の演技者であり，彼の台詞があまりに冗漫で平板単調だったので共演者でさえもそれに我慢できなかったのだ。試演における Goethe の叱責にも拘らず，彼は横柄な話しぶりから抜け出せなかったし，短い命令形の効果を彼に発揮させる事だけが恐らくうまくいったのだろう，というのはぐいぐい引っ張ったり，のろのろ話したりというのは耐えられる代物ではなかったのだ。この作品の上演に際して突然事件が起きた，それは小さな Weimar 王立劇場ではまだ起った事もなく前代未聞のものだったろう，即ち大公国の官吏が一人大胆にも，口笛を吹いて劇を嘲笑したのであった。Karl August は〔……〕手すりにのりだして下を見て叫んだ，『余の妃がいる席で口笛を吹き鳴らす無作法な男は誰だ？ 警官，そいつをひっ捕えろ！』。そして〔……〕男は3日間本署に留置された。——他日 Goethe は Riemer に述べたそうである。彼が私に語ったところによれば，即ちその男の言う事はまるきり間違いという訳でもなかった，もしエチケットや私の地位が邪魔しなかったら私もその男に味方したろう。作法上からは劇場の外に出るまで待つべきだったろう，と」(L242)。

在来の殆んどの Kleist 研究者が取り上げている失敗の情景がこれであるが，その他に僅かずつながらこわれ甕の上演に触れた同時代者の報告がある。Goethe の日記 (L239a), Riemer の日記 (L239b), S. Schütz の日記 (L239c), H. v. Knebel の弟宛書簡 (L244), Riemer の Frommann 家宛3月9日付書簡 (L239b), Luise Wieland の姉宛1811年4月19日書簡 (L246), Zeitung f. d. e. Welt の1808年3年14日付記事 (L248a), 同じく4年4日付記事 (L248b), Falk の記録 (L241), J. Falk の Prometheus (4号, Wien 1808) の記述 (L249), F. Passaw (Pantheon, 1810) の記述 (L251), K. A. Schwerdtgeburth の記述 (L243)。

こうした上演報告の中で，失敗の責任，失敗の原因の所在を，たいていの人は上演にでなく，原作に置いて述べている。即ち Adam の俳優 Becker で失敗したのでなく，最後の Eve (出版本の異曲にある) の止む所を知らぬ長台詞で失敗したと考えている。ただ Genast の報告のみが「失敗の責任者は Adam の演技者であり，彼の台詞……」と述べているだけである。上述のように，Genast の叙述の出所そのものにも疑わしい面もあるし，Goethe が Falk : Goethe aus näherm persönlichen Umgange darstellt (1812) の中で1810年末に Falk に向って，「君は彼の水甕を当地の劇場で上演するのに，私がどれほどの努力を実際にされたか御存知です。それでも旨くいかなかったのは次の事情です，即ちその他の点では機知に富んで滑稽な題材に，急激に展開する事件の進行が欠けているのです。しかしその責任を私に帰すこと，それ故 Wemiar へ挑戦を向けるという事が作品の中にあったのですが，責任を私に帰す事は，Schiller が言うように，その謝罪の理由を神経の非常な敏感さとか病気の中でのみ見つけ得る，自然のひどい誤ちを意味しています」(L252) と述べているのと，上演後6日目の3年8日に Goethe が Riemer や俳優 Wolff 夫妻，Elsemann 嬢と小納会を催した事，Kの死後4週間の1811年12月18日付 J. Schopenhauer 宛 Goethe 書簡「親愛なる友よ，貴女は昨晩，少し前に我々のところでばらばらになったこわれ甕への関心をあれほどお示しになったので，私は親愛なる貴女のお望みですが受け入れる事はできません。ここに恐らく劇場で上演される予定のその劇の短縮したものがあります。貴女が全体を記憶しておいでですので，貴女や試補氏〔Müller v. Gerstenbergk〕には，恐らく2つの例を対照

したり，また現存する中で余りに多くなされたか，それとも殆んどなされなかったかどうか，判断する楽しみがあります。貴女はこの点によって，特別な好みをお示しになるでしょうし，実行し得る限りは上演を早めるでしょう」（L253）で明らかに Kleist の出版本における Eve の告白の短縮に賛成している事から， Becker による Adam の配役の失敗に罪は着せられないだろう。しかしこの Becker という俳優そのものと Genast の記述の信憑性に関して，H. Sembdner のとりあげ方は，確かに充分こわれ甕の上演失敗の原因追求については重視すべきである。そうした Sembdner の論述を重視して論を進めよう。

芝居のプログラムから知られるのは，劇が3幕に分けられたという失策だった。これは当時 Goethe 自身が，彼の喜劇「Die Mitschuldigen を1幕物で書き，上演にあたって彼自身が3幕に分割して，1805年に Weimar で上演しているように，余りに長い幕は避けて劇場上演上の約束事として幕を分けることがあったからだという。しかしKの「こわれ甕」がどのように3幕に分けられ，第12幕が長い「異曲」の形で上演されたか，或いは後の出版本の短い形でなされたかを知っておく事が，この際重要である。

後者については，すでに L. Tieck が異曲を「附け加えたもの」にとっており，その後 E. Schmidt は「lange spätere Variant」について述べ， G. Minde-Pouet は Schmidt の序言を「喜劇の唯一の有機的結末はもともと短い草稿である」という補遺で補っている。しかしこれに対する意見は， Meyer-Benfey によって代表されて来，最近では， P. Goldammer (Variante oder Urfassung? In: Neue dt. Literatur, Jg. 4, 1956, S. 115～124) である。それ故依然論争は疑問のままである。それで例え異曲が原草稿の構成要素とみられようとも，依然Kがすでに Weimar の上演に，舞台にふさわしい短縮を計画していただろうという可能性も存在し続けたのである。

しかしこうした異曲に対する疑念に答えるものが，すでに1808年3月11日の Allgemeine Deutsehe Theater-Zeitung, 21号の交換書簡通信にみられる。

即ち「Weimar 発．3月2日に Dela Maria の一幕オペラ der Gefangene を上演した。これに続いで3幕喜劇こわれ甕が始めて上演された。その題材は大変控え目である。或不正な村長が，オランダの司法監査官にある朝不意に訪問され，その時彼はまだ前夜の傷跡を体に残している。監査官は公判日に陪席しようというが，村長は自分のかつらを焦がしたと述べるので禿頭で公判を行わねばならない。自分の未来の娘むこを，自分の娘と暗い部屋にいて逃げ出す時，自分の歴史的にとても珍らしい甕を割ったと訴える百姓女が現われる。娘の恥しげな沈黙や，村長の狼狽や禿頭の傷から，我々はすぐに村長が昨夜何かにかこつけて少女 Eve の床にいたのだと推察する，しかし大変な事に，我々は今や第2幕，そして（全部で2時間半もかかるものでした）第3幕をみな一つの審問で一緒に傾聴せねばなりません。話し手には恐らくふさわしいし，話し手には面白いでしょう，しかし劇作家は発見した真実をそんなに果てしなく最後の告白から遠ざけてはなりません。著作者が劇作家でない事が，劇作法の無知となって表われています。私は彼が v. Kleist の一人だと聞いております。勇敢な大佐がソックスをはいたが拍車を取りませんでした，そして Thalia の衣裳にまきこまれたので，数時間も軽い着物を犠牲にしてとうとう抜け出るまでころげまわらねばなりませんでした。観客は，名誉な事に劇の終りに（私はここでは体験しませんでした）本当に床をどんどんとやる事になりました。恐らく同じ忍耐をしても Varelius Maximus や無趣味な学校君主だけがこの駄作に興味を持つ事ができるでしょう。—Becker 氏は村長 Adam として立派でした。彼の表現はぴったりでした。 Elsermann 嬢，本当に悩んだ語り手，少女 Eve は実にうまく衣裳を着ていました。 Unzelmann 氏は書記 Licht の調子がぴったりで，Wolff 夫人は Marthe Rull 夫人でした〔！〕。監査官は Oels 氏， Frau Brigitte は Silie 嬢，百

姓 Ruprecht は Wolff 氏でした」(L247)。

これからみるとはっきり長い「異曲」が上演されたとみるべきである。その表現が「非常に調和のとれた」と記された Adam としての Becker 氏が長い台詞で倦ませたのでなく，「実際の退屈な語り手」は少女 Eve だったのである。彼女の夜の事件の描写は「異曲」の中で300詩句以上要求されている，きれいだが，まだそれほど熟練していない女優にはこなしきれない課題だったのだろう。

Elsermann (1787～1831) は「好ましい外観や響きの良い声に助けられて」観客の喝采を得，更には「特別な Goethe の賞揚」が彼女の俳優としての形成にプラスしていた。甕上演の頃には彼女は勿論「Theater-Zeitung」の批判から判るようにまだ新米で充分人を心服させるたる俳優ではなかった。フランス小喜劇の中では彼女は「魅力ある素朴な演技」によって衆に抜きんじていて，「そのような素朴な性格の表現についての絶えざる訓練によって，彼女は確かにこのジャンルで，いつか完全な域にまで達し得るだろう」と言われていた。またオペラ「Zwei Worte」の Rose の役は彼女の力に余ったし，「Lorbeerkrang」の中でも期待に添う所までいかなかった。彼女の名声は彼女が俳優 Friedrich Lortzing との1809年の結婚後に，Lortzing 夫人として始めて得られた。彼女はとりわけすばらしく，Schiller の Gorzi 翻案の Turandot,「Braut von Messina」の Beatrice,「Mitschuldigen」の Sophie を演じた。それで彼女が Eve として「実にうまく衣裳をきていた」という批評家の注は，彼女が他の俳優とは違って自分で衣裳を整えたことを指している訳で，実は非難しているのである。

L247 に基いて，第1幕を第5場までとし，第2幕は6場から10場までとし，その後11場以後が第3幕とされている。この第3幕が「Theater-Zeitung」の証言によるとそれだけで一時間続いたのだった。確かにこの第3幕の823詩行は通例の演技会話テンポにおいては約55分を必要とする。(この計算だと第1幕1410詩行には94分，第2幕196詩行には13分の上演時間がかかる。) 短い2休憩を加えて，Kの短縮されない上演は殆んど3時間かかる計算になるという。しかし Weimar は2時間半かかったとされているから，省略は第1幕の数多くのしゃれや脱線に行われたと推定せざるを得ないだろう。

それ故Kが失敗した Weimar の上演後に，彼の喜劇の質を証拠立てるためにこの第1幕からの抜き書きを「Phöbus」に「最初の雑誌の計画によると我々はここに大作品を載せようと思っていた，だがこの数年前に完成した小喜劇がちょうど Weimar の劇場で失敗したので，どこにその理由があるか，或程度調べ得る事は我々の読者の興味を惹くだろう。つまり一種の最近のニュースとしてここに載せるわけなのである」と注をつけて載せたのは，恐らく偶然ではないだろう。

Kは作者としてあげられていない，これは Goethe にも Schiller にも Weimar の慣習としてそうされていた。だがプログラムに作者の名がでなくとも勿論観客は知っていた。

Phöbus 3月号に載せられた「Fragmente aus dem Lustspiel : Der Zebrochene Krug」は確かに Weimar 上演失敗を反省する意味をこめていた，そしてその雑誌に載せた「こわれ甕」断片に対する批評も2，3の雑誌に載っている (L234, 252, 267)。

その後1811年出版の「こわれ甕」についてもまたいくつかの批評がある。

2 その後の上演

Kの死後の「こわれ甕」上演の努力は1814年から始まっている。割合はっきりしているの

を年代順に次に略述する。

Wien の Burgtheater では1850年に始めてこの作品が成功したのだが，1814年には，劇評家 J. Schreyvogel に上演原稿が手渡されている。彼は「作品全体は殆んどこわれた甕についての審問から成っている，最後に，甕は村長自身によって，百姓娘の寝室にのりこもうとした時こわされた事が暴露される。みじめにも」と書いて上演を拒否した。München では kgl. Theater am Isartor で1816年11月27日に上演された。それを「Münchner Theater-Journal für 1816」は伝え，その上演の配役を寸評と共にあげている。この上演は原作に正しく従おうと努力したようである。Breslau では Breslauer Nationaltheater で1818年4月14日に上演された。再演は1818年に2回，1820年に2回その後1822年に2回と回を重ねたが，その後 Adam 役の Schmelka が Breslau を去ったため，レパートリーから消えた。1828年7月9日になって，やっと新らしい本読みが行われたが，これは Hamburg 上演シナリオに従ったとみられる。この Breslau 上演は Winkler の1820年11月20日の日記，Berlin の「Gesellschaften」1818年4月25日号，「Ztg. f. d. e. W.」1818年，Nr. 114 に批評が載せられている。Berlin では，Königstädtisches Theater で1825年1月18日に上演されたが，これは Breslau からやって来た Schmelka を中心に行われたので，時間的には Hamburg 方式以後であるが，Breslau の上演法を加味していると思われる。Winkler の日記のメモには「Das Lustspiel gefiel beim Publikum auch sehr……」とあるが，この Berlin という都会の頽廃した空気の好みに合わず，1月25日の再演後はレパートリーから外された。

一方 Hamburg の劇場監督兼俳優 F. L. Schmidt は1820年9月28日の，彼のシナリオ，出演，演出で「こわれ甕」の突破口を開いた。彼は語っている。

1820年9月28日に私は一つの実験を敢えて行った，それは以前に Goethe すら完全に失敗した事，即ち H. v. Kleist の喜劇「こわれ甕」の上演である。私はそれを一幕に纏めて，程よく短縮した。この形は好評で，間もなく観客の愛好劇となった。それは私を村長 Adam として常に非常に極だたせたが，一方讃辞と共に，Frau Marschall が百姓女 Marthe として見せた風俗画の事も述べねばならない。他の舞台でも「こわれ甕」を，完全に私の構成で上演した（現在も上演している）。従ってこの形式は多分，かの優れた，しかし充分に価値を認められる事のなかった詩人の新機軸の喜劇をドイツの劇場のレパートリーに加えたという功績を持つのである，と。

この際 Schmidt 自身が Adam の役を演じて，あらゆる俳優にとって今日も尚通用する模範となっている。彼は勿論Kのテキストの改作を利用した。が，自分でも改作の不完全さをもよく知っていた。Tieck にあてて彼は「このように素晴らしい財宝を黒く塗りつぶさねばならないというのは全く悲しい事です」と書いている。この Hamburg 初演に関する批評は2つあり，これの Hamburg での以後の上演は，Winkler の日記によれば1820年10月から1831年6月までに32回にのぼっている。

1821年には，Tieck が Kleist「遺稿全集」を出しているが，その前書きに，或程度異曲にも触れている。それに関して Schmidt が Tieck に手紙を書いている（Hamburg, 24. 4. 1824）。

「こわれ甕」に私が行った短縮が，貴君の同意を得るかどうかは解りませんが，私はそれに取り掛かる前にあらゆる詩節に対して，非常な苦斗をしたという事は言えるのです。しかし素晴らしい詩人への私の共鳴が，作品を舞台向きにするのに幾らかでも成功したかと言えば，否定せざるを得ません。このように素晴らしい財宝を全く黒く塗りつぶさねばならないのは全く悲しい事です（前出）！　この事は

貴君がいかにもぴったり批評されたように，仕方なく強制せざるを得ない暴逆な行為に属しております。

1822年8月4日の Schmidt の改作で上演された，喜劇役者 A. Gern の Berlin 興行はあまり評判とならなかった。この初演については，「Theater-Schulz」とも呼ばれた Berlin の劇場批評家 F. Schulz は，8月17日の「Berlin Nachrichten」の中で「村長の演出は勿論非常に独創的な喜劇力，人間観察，研究の賜物であるが，しかし多くの細部は Gern 氏の功である」との一節を含む批評を述べている。これは2回の上演でレパートリーより消えたが，20年後の Döring の技術で息を吹き返している。この Berlin の上演では，喜劇役者 Gern はこの役を性格俳優にあたると誤まって解したのだった。（しかし1850年の Burgtheater での上演は当時の素晴らしい性格俳優である La Roche にあてて成功している。）

1822年10月16日の Braunschweig での Klingemann の上演では，その後の再演が1825年8月までの間に7回行われている。ドイツのその他の都市へは，Schmidt の台本によって，1820年代に拡がって行っている。

例えば Schlosse zu Wolfenbäitel, Kassel, Darmstadt, Mannheim (Großherzogl. Hof-und Nationaltheater), Altenburg, Dresden, Breslau, Frankfurt/M., Hannover, Detmold, Stuttgart, Riga, Danzig, München, Karlsruhe, Wien, Hamburg (Thaliatheater), Weimar, Gotha, Wiesbaden, Augusburg.

あちこちで上演され，勿論いろいろな場所に批評が書かれている。しかしこの段階では，シナリオはKの草稿原稿に基くものと，Schmidt の改作が主なものであった。

3　更にその後の上演

1842年4月4日の D. F. Strauß (Stuttgart) が F. T. Vischer に宛てた手紙には次のような事が書かれている。

「数週間前に我々がすでに春中待っていた劇場で，Kleist のこわれ甕を見る事になりました。その劇は舞台で非常によい出来ばえで，見応えもあり，聞くところでは大衆の評判もよく，恐らくレパートリーに入るでしょう。Döring が村長 Adam を素晴らしく演じました。作品は多分 Kleist の書き上げた最上のもので，他の彼のあらゆる作品に見られる病的なものは何もありません……題材は実に全く喜劇的であります，Oedipus Tryrannes の題材が悲劇的であるのと同様に喜劇的であります……」

またさらに1844年4月15日には Potzdam でも上演され，Berlin ではレパートリーの中に再び入っていたし，1847年には「Karlsruhe 新聞」には W. H. Riehl も論評している。そして前述のように1850年3月2日には Wien の K. K. Hoftheater (Burgtheater) の当時の監督 Heinrich Laube が「こわれ甕」を Wien で上演する事になった。彼は後に報じている。

最初に私は「こわれ甕」を持って来た，それはここではかつて上演された事がなかったし，従って成功した事もなかった。それは余りに北国風で，あまりに冷く，考えすぎで，余りに抽象的に見えた。我々ドイツの同郷関係の相違はそこで非常にはっきり示された。Kleist がそれに属していた Mark 地方の同郷人仲間は，脚本が彼らの嗜好に相応しているのを見，その脚本に楽しく従う。Döring は村長 Adam を La Roche よりも更に軽蔑的に鋭く，厚かましく演ずる，そして Döring の性格描写は Mark 地方の基調と一致している。北ドイツのおかしさは……南ドイツのそれよりはるかに親しみやす

い。しかしまた，北方でもこのロマン派によって有名になった「甕」はとことんまで削除されねばならない。彼は場景にはあまりに散漫である……。

これは1889年までに44回 Burgtheater で演じられ， Wien での初演の時は， F. Hebbel もその実現に協力し，それを他の2つの喜劇と比べて論じてもいる。1854年7月27日には Dingelstedt が万国博の München で「こわれ甕」の模範的上演を当時の著名な俳優の全客演で行っているが，これはプロシャ王が臨席し，王が，提案された劇のリストから選んだのだった。この際は Döring が Adam を演じている。

こうして Dingelstedt が2人の有名な Adam 俳優の比較を次のようにする時代が展開していたのである。

私は， Schubert の死後最も有名な2人の Adam 俳優 La Roche と Döring を思い浮かべると，ドイツ演劇術の2人の老大家の間に，同じ効果を持つ解釈と上演における特色ある相違を識別できると思う。

La Roche は Adam の役を丸味をつけて演じていて，一方 Döring は鋭い。 La Roche は滑稽味があり， Döring はおかしみがある。 La Roche は逮捕される犯人の苦境が次第におかしく現われるように，みかけが静的であり， Döring は蝦足の自然な振舞に対して見事な対照をなす動的である。 La Roche は表情や所作では控え目な抑制をきかせ， Döring は傲慢な態度で。 La Roche は特に，老 Adam がまだ裁判席からみだらな眼つきでつけまわす Eve との傍白の中で見栄えがし， Döring は，判事，書記，百姓達との間で，誇張した言葉や身振りによって優れている。La Roche は役割全体においてその役割を理解した上で演じ， Döring は，変化する瞬間の中に役割を分解して演じている。 La Roche は発端から終末まで同じであり， Döring は次第に強めながら演ずる。 La Roche は法廷での実際の高めのテーブルにも，手すりも用いない風俗画の枠内で演じ， Döring は共演者より高い所に位置し，舞台を圧している。2人の俳優――どちらも自然派の仲間で，この派のチャンピオン――はその Adam で卓絶した印象を人に持たせているが，しかし幕が下りた後，観客は口々に言うだろう，私はこわれ甕を La Roche で見たとか，あるいは私は Döring をこわれ甕で見たとか。

3人目，後の滑稽な3人組の第1人者 Schmidt が，作品や役柄をどうこなしたかを，私は噂話で，だが実際に最もよく知っているうまい役者たちの口から報じさせることができる。彼らの意見はこうである。 Schmidt は余りにも冗長にさせすぎるので，芝居なのにまるで仮面劇のようである。彼が成功したのは，発端の偽の素朴さであり，また最後の驚愕であった，と。

こうした「こわれ甕」上演の経過の中で，Kの誕生百年記念に「こわれ甕」の Menzel の挿画による豪華本が出た。 Menzel はこの本をドイツ皇太子に捧げた。皇太子はKと同じく10月18日生まれであったし，Kの解釈者達のように，Kを尊敬していたのである。これには Dingelstedt が序文を書いた。本の題名は，

Der zerbrochene Krug. /von/H. v. Kleist. /Eingeleitet von Franz Dingelstedt. /Mit 30 Illustrationen und 4 Photographien/nach Original-Composition/von Adolf Menzel. /Berlin. -A. Hofmann & Co. 〔1877〕-Sr. Kaiserlichen und Königlichen Hoheit/Dem Kronprinzen des deutschen Reichs/und von Preußen/eherbietigt gewidmet/von/Adolph Menzel. ――

であり，これが初版だった。第2版は， Hamburg で全く同じ形で Druckerei Actien-Gesellschaft から出た。第3版は普及版の形で， Max Jordan の序文で， Stuttgart の Cotta から1898年に出された。第4版にあたるのは， Wolf Stubbe の前書で1964年の Hamburg の Broschek から出されたものであろう。第5版にあたるのは，1976年の新書版 (insel tache-

nbuch 171) であろうし，後書として Hans Joachim Piechatta が書いている。この本の初版の Menzel の素描については1878年に Bruno Meyer が解説している。

こうしたKの死後の「こわれ甕」の上演を追い，豪華本出版まで辿ってみても，なるほど，Goethe の Weimar 上演は失敗したが，その後暫らくの間 Kleist の作品が評価されずにいたというような批評家の考えには，疑問を感じざるを得ないし，Kleist の劇作品のうち舞台上演に難点のあるものはしばらく上演されずに置かれたが，「Käthchen」や「Homburg 公子」といった代表作は，非常に数多く上演されている点からみて，Kには最初人々が無理解だった，とする数多くの批評家の言には，疑念を感じざるを得ない。